

環濠集落成立に関する一考察

市川秀之

はじめに

奈良盆地や河内平野の村々の中には、堀を村の周囲にめぐらした集落がみられ、古くからさまざまな研究がなされてきた。このような集落は環濠集落と呼ばれ、殊に歴史地理学においては一つのハイライトともいえるべき研究テーマであった。小論は主として発掘調査の成果をもとに、この環濠集落の成立に関して若干の私見を述べることを目的とするが、それ为先だちこれまでの研究史を概観することとした。

環濠集落に初めて研究の目を向けたのは地理学者小川琢治氏であった。^①小川氏は環濠集落を含む条里制の影響を受けた村落を垣内式村落と名付け、それが中国の制度に範を取り条里制施行時に形成されたものであることを説かれた。このような小川氏の古代成立説に対し、牧野信之助氏は環濠集落が

防衛のために作られたことを述べ、その成立時期が中世であることを主張された。牧野氏の中世成立・防禦施設説を戦後になって、さらに発展させ確かなものとしたのが秋山日出雄氏であった。^②秋山氏は堀や土塁、入り口の施設など環濠集落の構成要素について説明された後、「大乘院寺社雑事記」等の史料を駆使され、幾多の実例を挙げられ、それが中世後期の戦乱の中で、農民によつて防衛のために造られたことを証明されたのである。この秋山論文により環濠集落の成立・防禦施設説はほぼ決定的な地位を得たのであるが、それを特定村落によつて立証されたのが渡辺澄夫氏であった。^③渡辺論文は、小論の内容と密接に関連するので、その概要を紹介したい。渡辺氏が考察の対象とされたのは興福寺大乘院領若槻庄である。この庄園には徳治二年（一一三〇七）の「若槻庄土帳」^④が残るが、これに見られる庄域は近世の村域に引き継がれ、それ

はそのまま現在の 大和郡山市若槻町の町域に重なる。「若槻庄土帳」には徳治時点の坪付の他、旧名としてそれ以前の名の記載があり、渡辺氏はそれをもとに平安末・鎌倉初期の村落景観を復原されている(図1)。これによると当時の若槻庄は完全な散村形態を示している。ところが徳治時点になると、かつてはまったく均等であった一〇の名は、二〇の名に解体し、またその規模も不均等なものとなっている。このような均等名の解体にもなつて、かつての屋敷地も分解するのであるが、屋敷の占位と反別総計は旧の通りであり、依然として散村状態に変化はない。その後、応永一四年(一三九七)の「反銭算用状」にも屋敷一丁五反とあり、徳治の村落形態に変化はなかつたと思われるが、文正元年(一四六六)の「土帳」に至つて村落形態には大きな変貌が見られる(図2)。この時期には三条一里の三四坪に屋敷七反が集中し、その周囲を堀溝によつて囲まれるようになる。若槻は図3に見られるように今日でも典型的な環濠集落であるが、その原型は室町期に求められるのである。渡辺氏は若槻庄にみられる集村化、環濠集落化の原因として、中世後期の郷村制を挙げられ、名主層を中心に作人等の協力を得て環濠集落が形成されたことを述べておられる。環濠の機能としては当然防禦が考えられよう。以上が渡辺論文の要旨であるが、この論文によつて牧野、秋山両氏によつて提唱された中世成立・防禦施設説はほ

ぼ全面的に認められるに至つたのである。渡辺論文以後歴史学の立場から環濠集落を取り上げた研究はなかつたが、近年水野章二氏^⑧の研究が出された。また中世村落全般にわたつて非常に実証的に考察、復原を試みた研究に金田章裕氏^⑨のものがある。地理学の業績としては、藤岡謙二郎氏^⑩、村松繁樹氏^⑪、谷岡武雄氏^⑫の研究があり、水利との関連については堀内義隆氏^⑬の詳細な研究が出されている。地理学からの研究は主として環濠の防水、灌漑の機能に注目する点、特色を持つ。また若槻在住の郷土史家、喜多芳之氏^⑭の研究も特筆すべきものがある。

以上環濠集落に関する研究史を述べた。特にその成立のプロセスに関しては、秋山、渡辺両氏の研究によつて概略を理解しうるが、年代の異なる土帳類の比較による研究だけに具体的にどのようなようにして環濠集落が成立したのかについて不明の部分が多い。環濠集落は西日本に多い集村型の村落の中でも、堀という形で明確な境界表示を持つ特異な存在である。しかしその特異さゆえ、村落の範囲が明確であり、村落(集落)の成立を考える時には有効な指標となるのである。特に渡辺氏の研究された若槻などは、今日でも村落史研究のモデルとして取り上げられることが多いだけに、集落化、環濠集落化のさらに具体的な過程の解明は不可欠といえよう。最近ことに近畿地方の平野部では開発が進み、それにともなつて

中世の庄園遺跡の発掘も増加している。これまで比較的低調であった中世考古学も、このような流れの中で急速な進歩を見せている。特に畿内では瓦器編年の確立によって遺跡に年代が与えられ、考古学の成果と文献史学の成果を合わせて論じられるまでになっている。以下このように増加する、中世考古学の成果を用いて、環濠集落成立の問題を考えていくこととする。

一 第一の段階（環濠屋敷）

私は今日見られるような環濠集落は三次の段階を経て成立したものと考えている。以下順に述べていきたい。

〔若槻庄関連遺跡〕^④ 橿原考古学研究所によって行われた若槻庄関連遺跡第三次発掘によって、幅三メートル、深さ一・五メートル、一辺約五〇メートルの環濠に囲まれた中世の屋敷地が出土している（図4）。この遺跡は奈良県大和郡山子美濃庄町域に所在し、前述の若槻庄区域とはほとんど接している。屋敷地は東部が調査区域外のために全貌を窺うことはできないが、完掘された堀の一边が五〇メートルであったことにより、恐らく一辺五〇メートルの正方形の環濠で囲まれていたと調査担当者は考えておられる。この環濠内には二間×四間の主屋（SB 02）が建ち、その周りを二間×三間以上のSB 01や二間四方のSB 03、また正方形で焼けた床面を持つSX 01等

の付属建物が並んでいる。主屋（SB 02）の前には長さ二〇メートル、深さ五〇センチの池と思われる遺構があり、また堀の内外からは多くの井戸が発掘されている。この屋敷地は一世紀から一五世紀にかけてほぼ連続して使用されていたものとされており、徳治土帳や文正土帳と時代的に重なり合うという点で大変興味深い発掘例である。住民について担当者は出土品等から野鍛冶を推定しておられるが、これには屋敷地の広さなど問題があると思われる。また屋敷地の面積が、もし五〇メートル四方だとすると、二、五〇〇平方メートルとなり、均等名における屋敷地面積の標準とされる一反を大幅に上回るなど問題点が多い。以上が若槻庄関連遺跡第三次発掘の概要であるが、私はこのように堀によって囲まれた屋敷地を「環濠屋敷」と名付け、それを環濠集落成立への第一の段階として位置づけたい。若槻の遺跡は今日の水田下より発掘され、また独立した屋敷地であった。このことに、遺跡の年代を加味して考えた時、「環濠屋敷」は徳治以前の村落の状態、つまり渡辺氏が平安末〜鎌倉期の村落形態として述べられた散村段階に対応すると考えられる。「環濠屋敷」の事例は最近増加しているが、類例として以下の二例を挙げることとする。

〔法貴寺遺跡〕^⑤ 奈良県磯城郡田原本町の法貴寺遺跡からも堀に囲まれた屋敷地が出土している（図5）。この屋敷地は西

辺五五メートル、南辺、北辺各四〇メートル以上で、北面は一重、西面は三重ないし四重、南面は二重の堀で区画されている。主屋と考えられる建物Aは三間×六間程度の規模であり、その他にも二〜三軒の付属建物が建つようである。屋敷地の北方からは水田趾、また南方からは法貴寺と思われる寺院趾が発掘されており、三者は屋敷地西方の溝によつて接続されている。この屋敷地の年代は一三世紀末から一四世紀末であり、また住人について発掘担当者は中世の国人法貴寺一党を支えた名主の一人であると推測しておられる。法貴寺周辺は水害の多いことで有名であり、法貴寺集落は昭和五七年夏の集中豪雨の際にも大きな被害を受けている。この発掘も水害防止のための河川改修に伴うものであった。法貴寺遺跡に見られる二重三重の環濠はこのような環境に由来するものと思われる。

〔観音寺遺跡〕^⑥大阪府松原市観音寺遺跡からも「環濠屋敷」が発掘されている。観音寺遺跡では多くの中世住居趾が発掘されているが、そのうち第2調査区のB地区からは、前後二時期にわたる住居趾が発掘された(図6)。I期は堀掘削以前の建物群で、二間×四間の庇付建物(建物1)、二間×三間以上の倉状の建物(建物2)、また二間×三間の庇付の建物が建つ。II期はI期の建物がすべてなくなり、新たな建物が出現し、その周囲を堀がめぐるようになる時期である。この「環

濠屋敷」にも三棟の建物がたつ。このうち二間×七間の建物4を発掘担当者は屋敷内の使用人の住居と考えておられる。この両時期の建物群はいずれも平安末〜鎌倉におさまり、両期の間にはほとんど時代差は無い。

以上の二例においても、屋敷地はほぼ散村形態を示し、また屋敷の継続年代も多少の差はあるが、平安末〜鎌倉期の枠の中に納まる。このことから考え、若槻庄の徳治以前の村落の屋敷地は散在的であり、しかも敷地の周囲を堀がめぐつていたと考えてもよいのではないだろうか。また「環濠屋敷」の住人としては、有力名主層を考えるのが妥当と思われる。

二 第二の段階(環濠屋敷群)

「環濠屋敷」は時代がたつと、分解や隣接地への屋敷地の拡大によつて、堀が連結したような形態へと発展する。このように「環濠屋敷」がいくつも連なったような屋敷地群を「環濠屋敷群」と名付け、これを環濠集落成立に至る第二の段階に位置付けたい。「環濠屋敷群」もいくつかの発掘例があるので紹介していくこととしたい。

〔宮田遺跡〕^⑦大阪府高槻市の宮田遺跡は中世の屋敷地としては殊に有名であり、これまでいくつかの研究がなされている(図7)。遺跡はA、B、Cの三区に分けられる。A区には計九棟の建物群、二つの井戸、および土拵墓がある。中心的

な建物は重複して柱穴が検出されたA・6・A・7であり、他はそれに付属した建物である。A区、B区の北側には自然河川が流れ、また両者は溝によって区画されている。B区は垣根によって南北二つに分けられる。それぞれが二・三軒の建物によって構成され、またおのおの井戸を持つことから独立した生活を営んでいたと思われる。C区はA、B両区よりもやや高い位置を占め柵によって三つに区分される。一番北には倉と思われる建物があり、南には二グループの建物群がある。橋本久和氏はB区の住人をA区に従属する人間とされており、奥野義雄氏はこれに対し、B区の住民の、C区の居住者に対する主従関係を強調しておられる。また原口正三氏は、A区画からは多量の輸入陶磁器が出土することによりA区住人の社会的経済的優位を認められておられる。この三区の住人たちの間に、経済的な差が存在したのは確実であるが、溝や柵で明確に区画された屋敷地に別々に住んでいるのであるから、その間に絶対的な主従関係が存在していたとは考えにくい。この三区画の面積の総計が約一反となることから、宮田遺跡の屋敷地は、旧名が分解して成立した新名の屋敷地の集合体であると考えるのが妥当ではないだろうか。

以上宮田遺跡の概要を述べたが、このような「環濠屋敷群」は一体どのように成立したのであろうか。和氣遺跡、西庄遺跡を例に考えていきたい。

〔和氣遺跡〕和氣遺跡は大阪府和泉市に含まれ、すでに和氣遺跡調査会、大阪府教育委員会によって三冊の報告書が出されている。ここでは「和氣Ⅱ」において発掘担当者が示された時代区分に基づいて遺跡の変遷を見ることにする。和氣遺跡の中世遺構はA区とB区に分れ、A区はⅠ・Ⅱ期、B区はⅢⅠⅡ期に時代区分される。ここではB区だけを取り上げる(図8)。Ⅲ期は同方向の建物が多く建ち並ぶ時期である。この時期には環濠ないしは柵が無く、区画は明確でない。担当者はこれらの建物群を三群に分けて、それぞれの間の主従関係を考慮しておられる。Ⅲ期の年代は一二世紀後半である。Ⅳ期はさらに2期に区分される。ⅣⅠ期は建物群の周囲に堀が掘られ、堀の外にも柵や溝によって区画された建物群が存在する時期である。担当者は建物7が主屋で、8・11等が副屋、10・35・36・47・48は納屋等の付属建物であるとされている。次のⅣⅡ期にはⅣⅠ期の建物は存在するが、さらに堀1が掘られ、堀1と以前から存在した堀3に囲まれるようにして建物1が建てられる。この建物1は大変大きな建物であることより、担当者はⅣⅠ期の屋敷地の住人と、建物1の住人とは同族関係にあることを述べられている。この両時期は一三世紀前の中葉の枠の中に納まる。Ⅴ期になると堀は埋められ、そこに一〇棟余りの家が建つ。時期は一三世紀中葉以降である。以上が和氣遺跡の変遷であったが、ⅣⅠ

Ⅰ期に先述した「環濠屋敷」が成立し、それからそう時代が下らないうちに、建物Ⅰが独立し、それに伴って堀Ⅰが掘られたことが分る。このⅣ―Ⅱ期がいわゆる「環濠屋敷群」の段階にあたるのである。

〔西庄地区遺跡〕^⑧ 西庄地区遺跡は和歌山市西庄地区に所在し、すでに数次の発掘が行なわれているが、一次発掘の第Ⅰ地区から「環濠屋敷群」が発掘されている。またすでに発掘担当者の辻林浩氏によつて報告書の他に、「西庄Ⅱ遺跡発掘調査の成果」という論文が発表されているため、ここではこの辻林論文をもとに西庄地区遺跡の概要を紹介することとする。この遺跡の中世遺構は二期に時代区分される(図9)。Ⅰ期は東西方向の二本、南北方向の一本、計三本の溝による区画がなされる時代である。東西方向の溝のうち北方の溝には二か所に張出しがあり、その場所に橋があったと思われる。この溝より北方は柵によつて、東西二地区に更に区分される。北西区には東西約一五メートル、南北約一〇メートルの石積み基壇があり、基壇上には掘立柱建物が存在した。また北西区にはこの建物の他、一間×二間の付属建物、井戸が存在する。次に北東区には三、四棟の比較的小規模な建物と井戸が存在する。また溝より南方には北方のような南北方向の柵はないが、辻林氏は南方屋敷地の広大さに比して、建物が貧弱なことを根拠に、南方屋敷地、南方屋敷地も北方と同じく東

西に二分された。この二つの屋敷地はそれぞれ一間×一間の建物二棟ずつによつて構成されることとなる。Ⅱ期になるとⅠ期の屋敷地の東側に、二本の東西溝を連結するように南北方向の溝がはしり、また南側の東西溝はさらに西方に伸びて北方に曲がる。つまりⅠ期の屋敷地の西側に新たな屋敷地が形成されたのである。Ⅰ期の建物は北西区の大規模建物以外はすべて改築され、また南西区からは建物がなくなる。時期はⅠ期の成立が一三世紀前半から中頃、Ⅱ期への移行が四世紀前半、またこの屋敷地群の終焉は一五世紀中頃から後半と思われる。西庄遺跡においては、独立した「環濠屋敷」の段階を見ることはできなかったが、「環濠屋敷群」の拡大の過程をはつきりと確かめることができた。

以上、宮田遺跡、和気遺跡、西庄遺跡の三遺跡を紹介したが、いずれも堀を連結させた「環濠屋敷群」の段階に属するものであった。また和気、西庄両遺跡の変遷を見たとき、「環濠屋敷群」が、前に述べた「環濠屋敷」から発展した形のものであるということも理解できるだろう。つまり和気や西庄のように拡大の形を取るにせよ、宮田のように分割の形を取るにせよ、単独に存在した「環濠屋敷」内から独立するものが現れ、それが元の屋敷地の堀の一部を利用して、新たな環濠を掘り、それによつて囲まれた区画に屋敷地を構えるようになった段階がこの「環濠屋敷群」の段階であると考えられ

るのである。この過程を若槻庄の変遷と照らし合わせた時、それが徳治前後の、旧名が分解して新名が出現し、またそれに伴って屋敷地も分解した時期の状況と非常に似ている事に気付くのである。恐らく旧名の解体は、景観的に見れば「環濠屋敷」から「環濠屋敷群」へという方向で進行したのであろう。しかし元の屋敷地の、すぐ横に新しい屋敷地を構えるのであるから、村全体とすれば、依然散村状態が続いていたことは当然である。

三 第三の段階（環濠集落）

これまで近畿地方の事例を中心に論を進めてきたが、今日近畿地方では一部の山岳部を除いて、村落形態としてはコンパクトな集村が圧倒的に多い。このような集村がどのようにして形成されたかについては、小論で取り上げた環濠集落の問題も含めて多くの議論がなされてきた。しかし現在の時点では、中世前期以前には散村が支配的であり、南北朝期以後、集村化現象が生じたことはほぼ定説となつた観がある。金田章裕氏は、奈良、平安期の屋敷地に関する史料をほぼ網羅的に、実地比定という形で検討され、古代においては疎塊村が一般的であつたことを実証されている。また個別村落を対象とした研究では、既に述べた渡辺澄夫氏の研究の他に、水野章二氏の横田庄^⑤、田村憲美氏の平野殿荘^⑥の研究などがあり、

いづれも中世後期における集村化現象について述べられている。小論においては発掘調査の結果をもとに、散村状態における屋敷地の変遷をこれまでみてきたわけであるが、残念ながらそれらに続く集村化現象を直接実証しようような考古学的資料を提出することはできなかった。集村化現象についてはまだまだ不明の部分が多く、考古学がこの問題に寄与しようる範囲は大きいと思われるが、これはいづれも今後の課題とせねばならない。そこで以下は筆者の推測も交えて論を進めざるをえない。

前章で述べたような「環濠屋敷群」はその後、集合し集村を形成することになる。この集村化は先学の研究でも明らかに通じ、惣村制と密接な関係を持つと思われる。若槻ではかつての庄屋屋敷を中心として集落が形成されるが、同じ奈良盆地の例でいえば、出雲庄^⑦（桜井市江包付近）では「小寺」大堂といった宗教施設、乙木庄^⑧では「堂坪」という、堂があつたと思われる坪が集村化の核となっている。当初は数軒の屋敷地の集合体であつたものが、数十軒からなる集落へと変化するのである。この際、集村化の中心となるいくつかの屋敷以外は当然移住を強いられることとなる。前章で述べた「環濠屋敷群」も当然その例にもれない。この時、移住した住人は、前代からの方法にしたがつて、自らの屋敷地の周囲に環濠を施したことが想像される。つまり「環濠屋敷群」が

更に増殖するようにして集村化現象が進行したと考えられるのである。渡辺論文では集村化現象が完了して初めて集落の周囲に堀が掘られると考えられ、その後の研究においてもこれは継承されているが、集村化以前の散村期の屋敷地が、「環濠屋敷」ないしは「環濠屋敷群」であったことが確かめられた以上、むしろそれがさらに大きくなってついには「環濠集落」へと発展したと考える方が自然であろう。このように考えると、集村化の過程の中にある集村は、村の中にも何本も堀が掘られていたものと考えられる。今日でも一部の環濠集落では、集落内に堀が入り込んでいる例がある(図10)。若槻でも神社の東側と、集落の西端部でその名残りが見られる(図3参照)。しかし大部分の村では、集村の拡大によって集村内に取り残された堀は埋め立てられ、道になったものと思われる。よく環濠集落の中の道はT字状になったりして見て通しが悪いといわれるが、これも以上の事に由来すると思われる。このようにして集落内部の堀は埋められ、村の外周の堀だけが残り、結果として「環濠集落」が誕生したと考へたい(図11)。

この「環濠集落」がいうまでもなく第三の段階となるものであるが、それは今日の集落に当たるわけであり、先程も述べたようにこの段階の遺跡発掘が少ないのも無理はないのである。ただ若干の事例があるので簡単に紹介したい。

〔唐古・鍵遺跡〕奈良県磯城郡田原本町の唐古・鍵遺跡は、すでに二十数回の発掘調査が行なわれている。この遺跡は弥生時代の大集落として全国的に有名なものであるが、最近の調査では「中世大溝」の存在が知られるようになった。藤田三郎氏はこれまでの調査の結果からこの大溝の全貌を復元されている(図12)。藤田氏はこの大溝を、唐古氏という土豪の館の外堀であると推定しておられるのだが、私はこれを鍵集落の環濠としてとらえたい。今日の環濠集落が、中世において「館」や「城」として認められていた例は枚挙にいとまのない位であるからそのように考えても、藤田氏の推定とは別に相反する事とはならない。この大溝は南北三五〇メートル、東西二六〇メートルにも及ぶ巨大なものであり、「環濠屋敷」、「環濠屋敷群」の堀であるとは考えられない。また藤田氏は、「館内部においては外溝と同規模の大溝が存在している。」と述べておられるが、これは集村化の段階で集村内に取り残された堀であろう。唐古・鍵遺跡では今後も発掘が続けられるため、中世大溝に関して新たな知見の得られる日も近いことであろう。また同じく田原本町の黒田大塚周辺の発掘でも、黒田集落の環濠と思われる大溝が出土している。

〔久我東遺跡〕京都市伏見区所在の久我東遺跡では三次にわたる発掘調査の結果、やはり「環濠集落」が出土している。正式な報告書が未完のため、詳細は不明であるが、東西八〇

メートル以上、南北一三〇メートル以上の環濠の中から五棟程度の建物群が出土している。この集落は室町初期に築かれている。

まとめ

以上、考古学の資料を中心に環濠集落の成立について考えてみた。小論では環濠集落が出現するまでに、三つの段階を考えたのである。遺跡の年代を中心にそれに年代を与えるとするならば、「環濠屋敷」が一三―一四世紀、「環濠集落」が一四―一五世紀ぐらいに成立したと考えるのが妥当であろう。また小論では集村化現象以前に、環濠を持つ屋敷が存在したことを指摘し、これと今日の環濠集落との間に一種の系譜関係を考えている。これまでの研究では、室町―戦国期の動乱の時代に農民の結合が強まり防禦のために環濠が掘られたという防禦施設説が強かったが、一・二世紀から「環濠屋敷」が成立していたという事実を目を向ける時、環濠の機能を防禦に限定することはできない。むしろ環濠成立時から水防の機能が強く、戦国期には防禦機能がクローズアップされたと考えたい。また近畿地方の神社には環濠を持つものが多いが、環濠の持つ宗教的な機能にも目を向ける必要があるのではなからうか。

以上の私見はいまだ未熟なものであり、また方法的にも強

引な点が多々有ることを自覚している。皆様方の御指導を待ちたい。また小論の作成にあたって西口陽一氏、宮崎泰史氏、今尾文昭氏、中井一夫氏その他多くの方々の御教示を得た。文末ではあるが心からお礼を申し上げたい。

註

- ① 小川琢治「人文地理学研究」、昭和三年。
- ② 牧野信之助「散居制と環濠集落」(『土地及び聚落史上の諸問題』所収、大正一三年)。
- ③ 秋山日出雄「大和環濠集落の史的研究」(『考古学論攷』1、昭和二年)。
- ④ 渡辺澄夫「環濠集落の形成と鄉村制の関係」(『史学研究』50、昭和二年)。
- ⑤ 菅孝次郎氏所蔵。
- ⑥ 『三箇院家抄』第二若槻庄条。
- ⑦ 『大乘院寺社雜事記』文正元年二月廿七日条。
- ⑧ 水野章二「日本中世村落に関する二、三の問題」(『新しい歴史学のために』一六六、昭和五年)。
- ⑨ 金田章裕「奈良・平安期の村落形態について」(『史林』五四―三、昭和四六年)。
- ⑩ 藤岡謙二郎「環濠集落論に関する覚え書」(『内田寛一先生還暦記念地理学論集』下所収、昭和二七年)。
- ⑪ 村松繁樹「所謂環濠集落について」(『人文研究』一―二、昭和二五年)。

- ⑮ 谷岡武雄「環濠集落―その変化過程に関する一考察」(『奈良盆地』所収、昭和三十六年)。
- ⑯ 堀内義隆「農業水利を中心とする奈良盆地の環濠集落の研究」(『地理学評論』三五―四、昭和三十七年)。
- ⑰ 喜田芳之「大和の環濠集落」(『日本古城友の会研究紀要』Ⅱ、昭和五一年)。
- ⑱ 「若槻庄閼連遺跡第3次」(橿原考古学研究所「奈良県遺跡調査概報一九八一年度」、昭和五八年)。
- ⑲ 橿原考古学研究所「大和を掘る」、昭和六〇年。
- ⑳ 今尾文昭「法貴寺遺跡発掘調査の成果と展望」(『奈良新聞』、昭和五九年六月二八日)。
- ㉑ 大阪府教育委員会・大阪文化財センター「観音寺遺跡 第2次発掘調査概要」、昭和六一年。
- ㉒ 『大阪府史第4巻』(昭和五六年)など。
- ㉓ 橋本久和「中世村落の考古学的研究」(『大阪文化誌』一―二、昭和四九年)。
- ㉔ 奥野義雄「中世集落と住居形態の前提をめぐって」(『大阪文化誌』二―三、昭和五二年)。
- ㉕ 原口正三「大阪府高槻市宮田遺跡再論」(『考古学論考』所収、昭和五七年)。
- ㉖ 和気遺跡調査会『和気』、昭和五四年。
- ㉗ 和気遺跡調査会『和気Ⅱ』、昭和五六年。
- ㉘ 和歌山県教育委員会・和歌山県文化財研究会『西庄地区遺跡発掘調査概報Ⅰ』、昭和五三年。
- ㉙ 辻林浩「西庄Ⅱ遺跡発掘調査の成果」(『和歌山県史研究』一一、昭和五九年)。
- ㉚ ⑨に同じ。
- ㉛ ⑨に同じ。
- ㉜ 田村憲美「畿内中世村落の領域と百姓」(『歴史学研究』五四七、昭和六〇年)。
- ㉝ 内閣文庫所蔵『出雲庄土帳』。
- ㉞ 片平博文「大和国乙木庄における荘園村落の発達過程」(『地理学評論』五三一―、昭和五五年)。
- ㉟ 藤田三郎「奈良盆地における中世館跡と近世集落について」(『住居と移住』、昭和六〇年)。
- ㊱ 桑原公徳「中世城館の分布と形態および規模」(『信濃』三二―一二、昭和五四年)。
- ㊲ 田原本町教育委員会「黒田大塚古墳」(同『田原本町埋蔵文化財調査概要2』、昭和五九年)。
- ㊳ 『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』、昭和六一年。

(関西大学大学院生

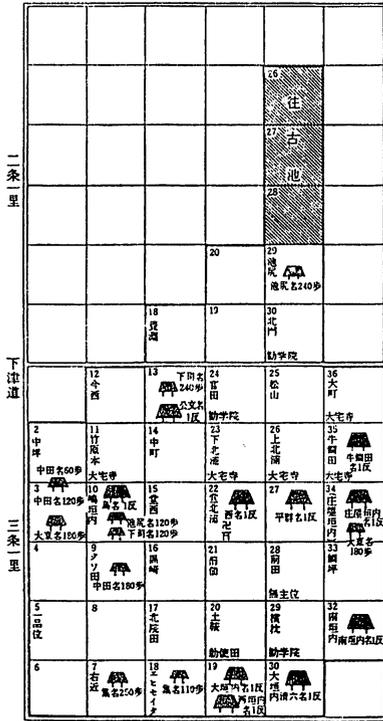


図1 平安末～鎌倉期の若槻庄
(註④より引用)

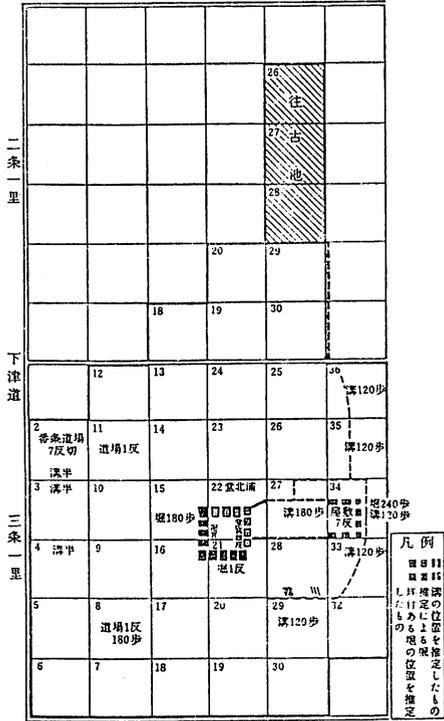


図2 文正期の若槻庄
(註④より引用)

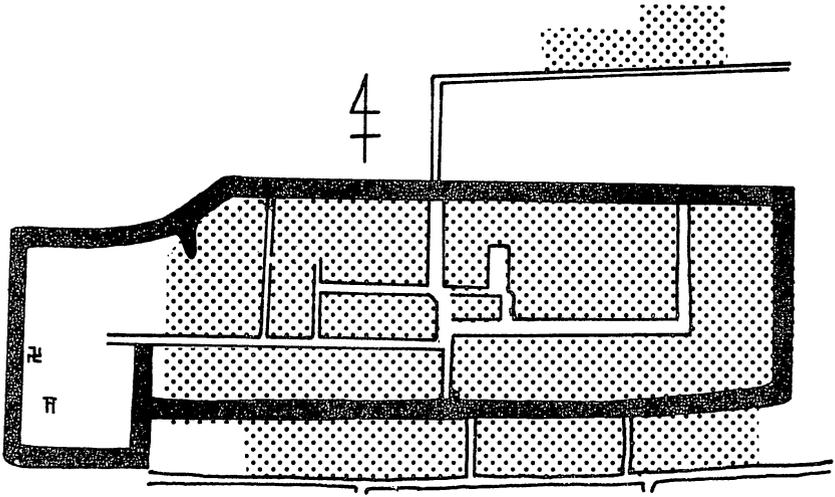


図3 今日の大和郡山市若槻

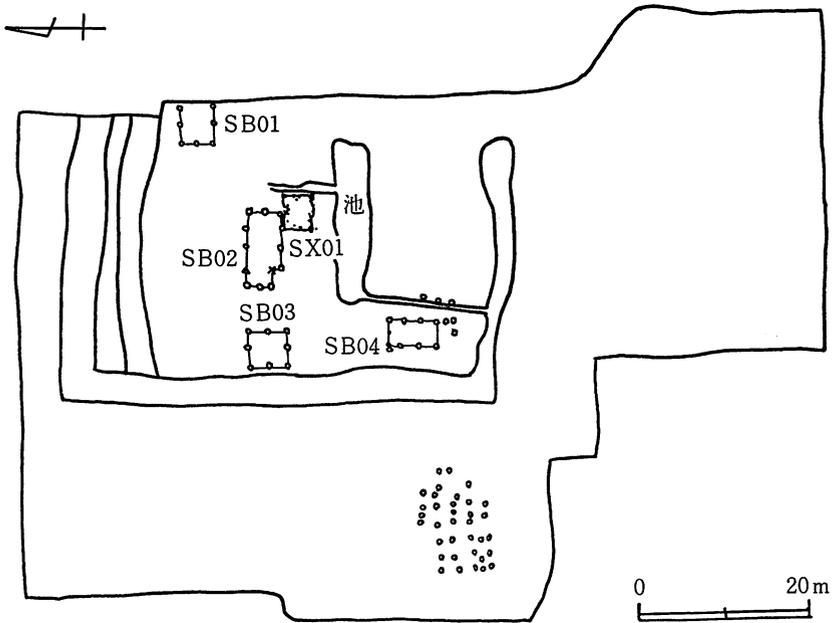


図4 若槻遺跡平面図（註⑤より引用）

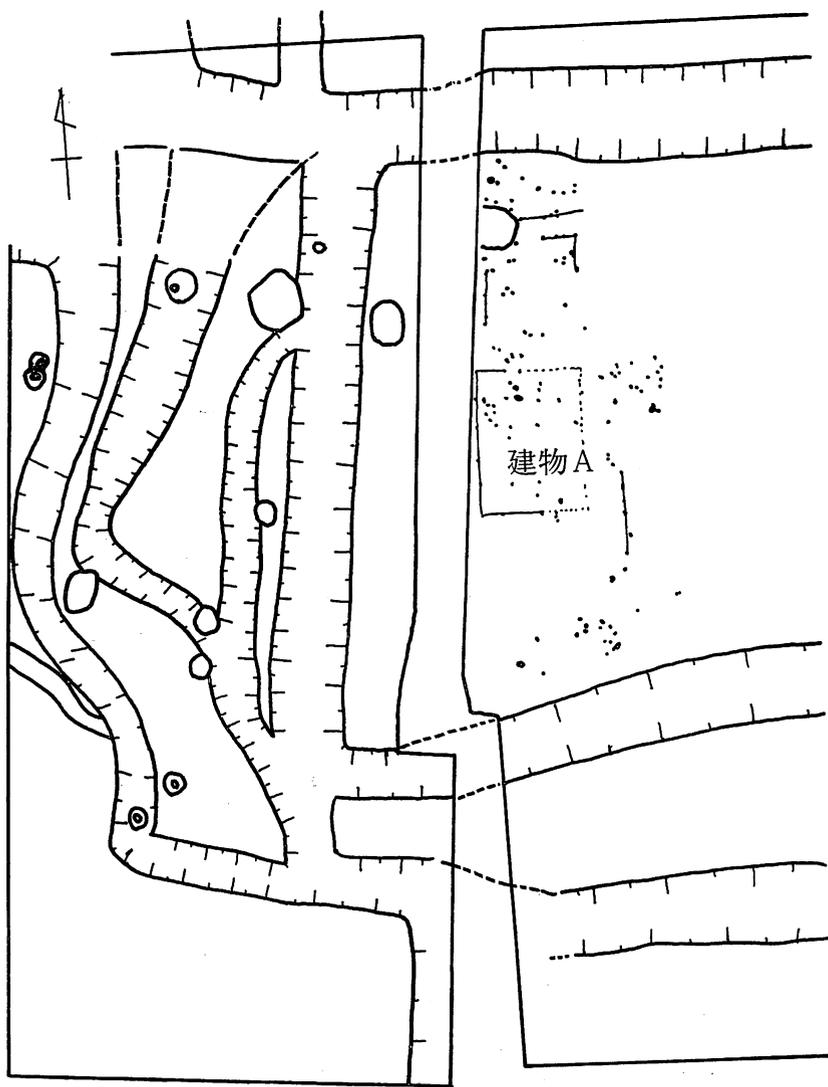


図5 法貴寺遺跡平面図（註⑩より引用）

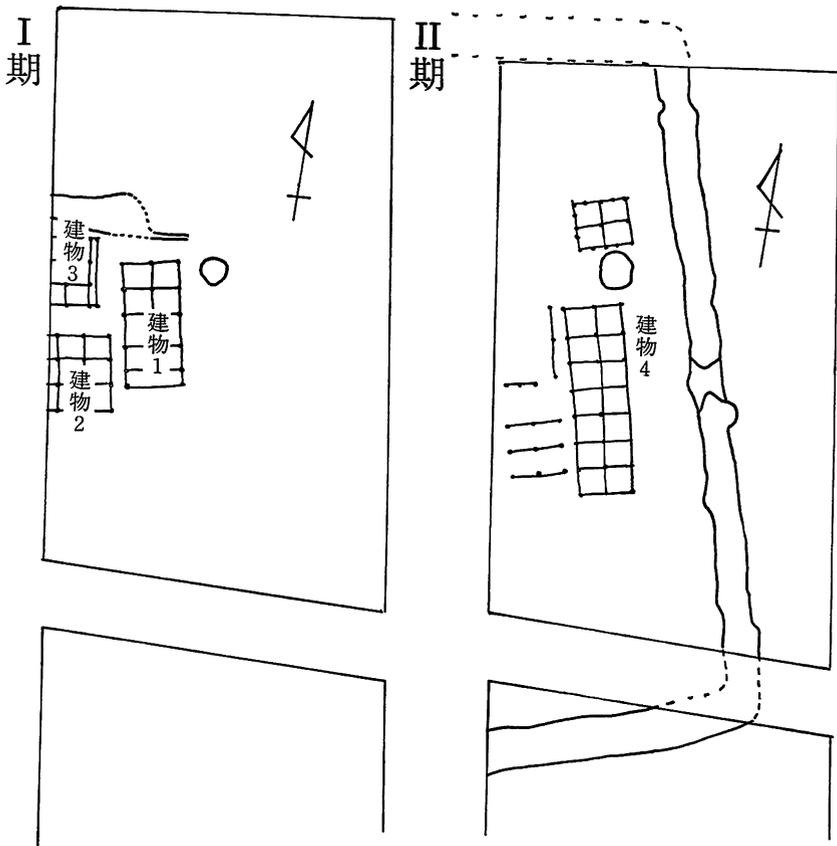


図6 観音寺遺跡I期II期平面図
(註⑭より引用)

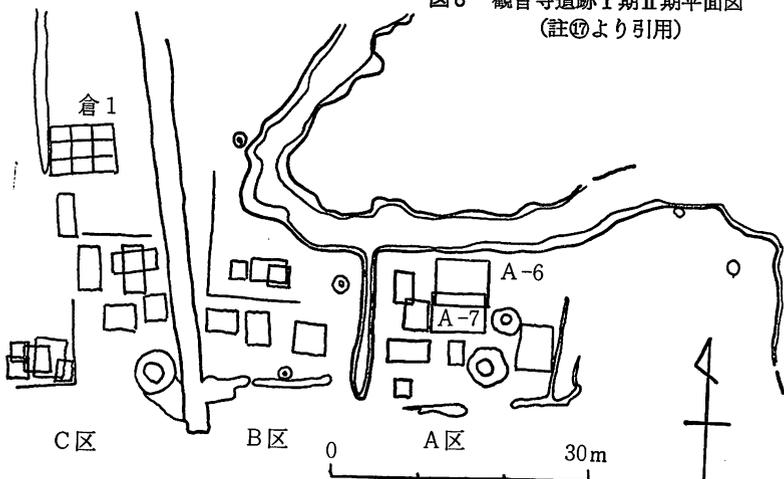


図7 宮田遺跡平面図 (註⑭より引用)

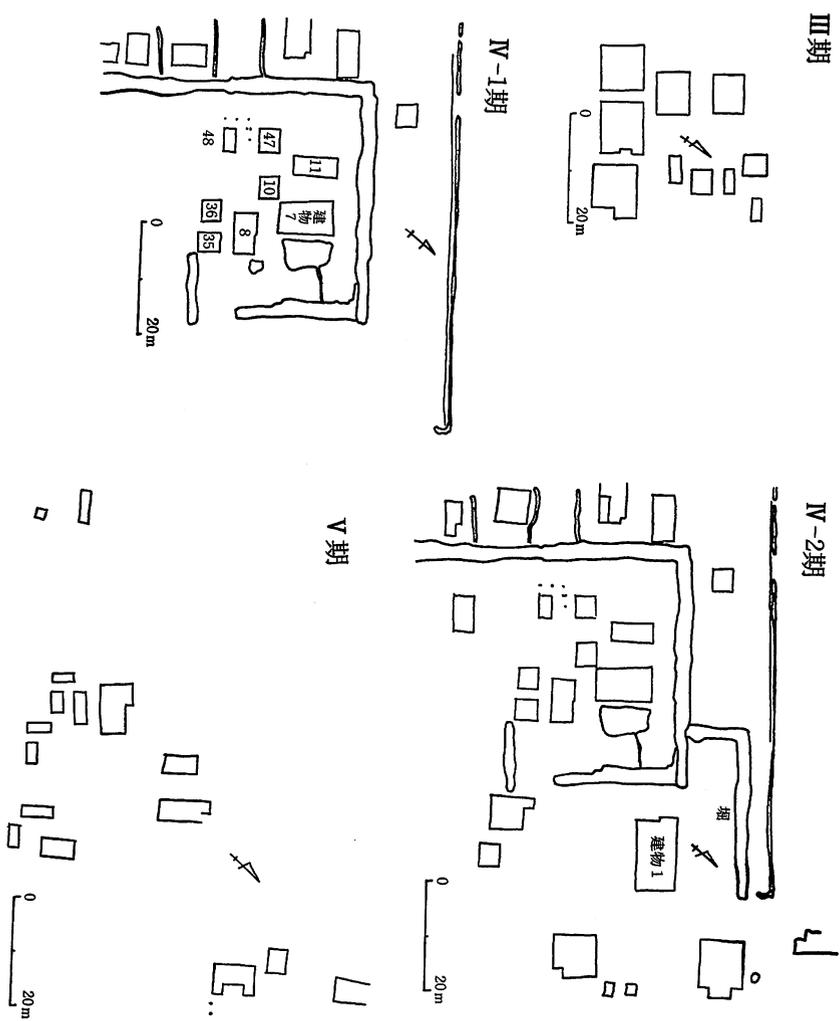
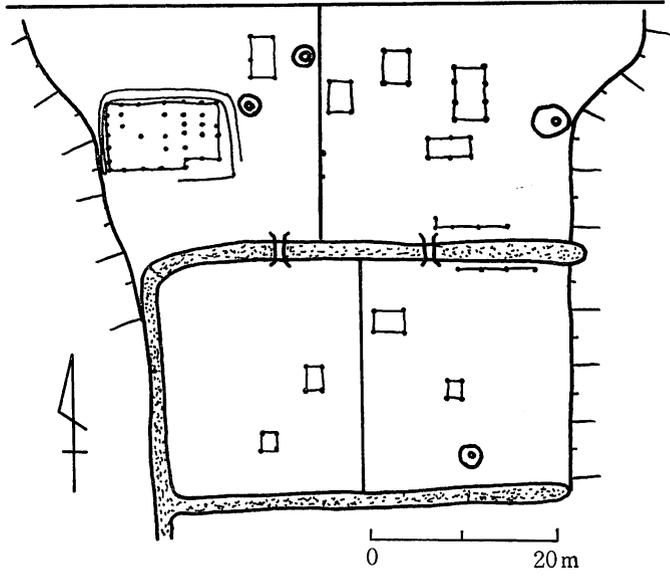


図8 和気遺跡平面図
(註◎より引用)

I 期



II 期

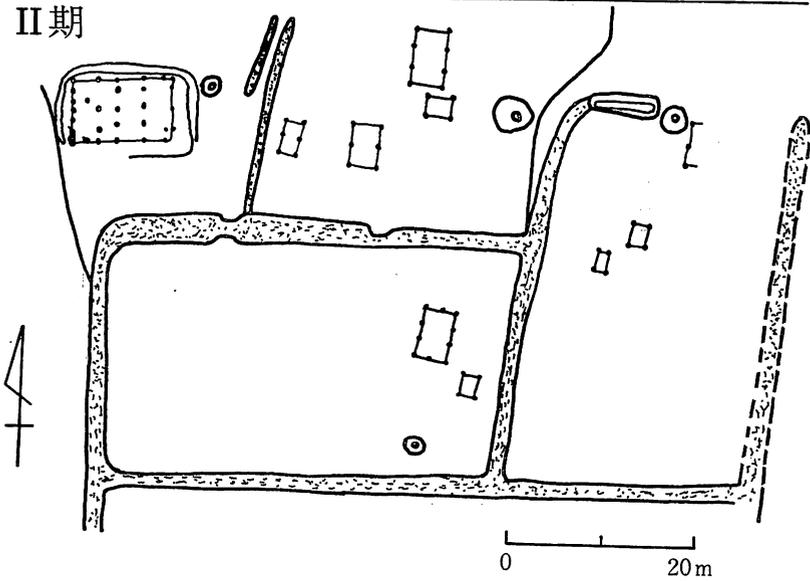


図9 西庄遺跡平面図 (◎より引用)



図10 複雑な環濠
上 大和郡山市番條
下 同 白土

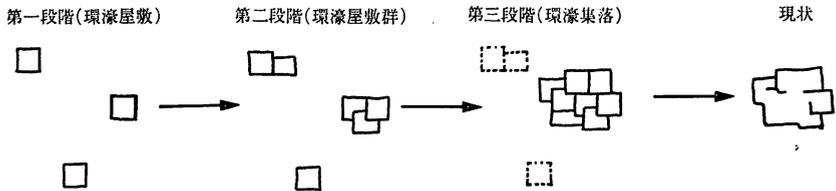


図11 環濠集落成立のモデル

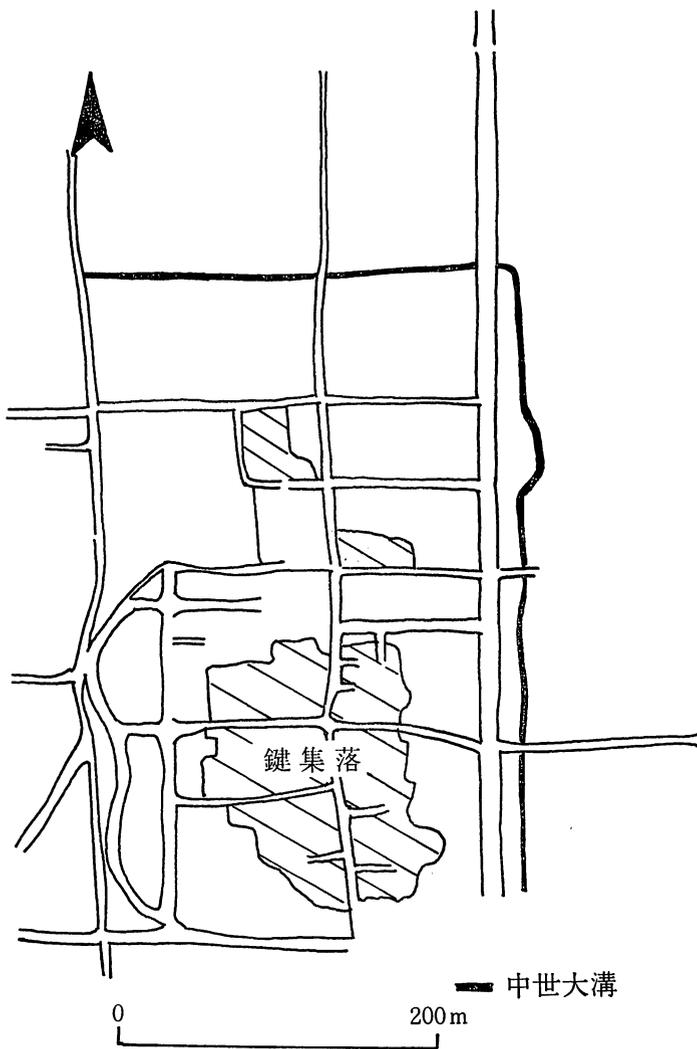


図12 鍵・唐遺跡中世大溝（註⑩より引用）